博物館と学芸員課程の思い出

迫田ひなの

1．これまでの略歴

私は2019年に西南学院大学国際文化学部を卒業後、西南学院大学大学院国際文化研究科で学び、コロナ禍真っ只中であった2021年3月に修士課程を修了した。2024年の4月からは朝鮮半島と九州の間に浮かぶ長崎県の離島、対馬市にある対馬博物館に勤務している。対馬博物館は2022年に開館したばかりの新しい博物館で、館内に長崎県対馬歴史研究センターが併設されている。センターの前身であった対馬歴史民俗資料館が所蔵していた江戸時代の対馬藩主・宗氏が遺した膨大な記録資料（宗家文庫史料）を引き継いでおり、約8万4千点にも及ぶこれらの文書群（そのほとんどは重要文化財に指定されている）を抱えているほか、旧厳原町郷土館所蔵していた史料を収蔵しているが、対馬博物館は歴史だけでなく、対馬の民俗、自然、美術などを扱う総合博物館だ。

今回、修士課程在学中と卒業後に西南学院大学博物館で働いていた縁で、学芸員課程設置40年の特集に寄稿しないかとお声がけいただいた。学芸員としての経験がほとんどないに等しい私が、学院のアーカイヴズに投稿するなど大変おこがましいことだと一度はお断りしたものの、今回寄稿させていただく運びとなった。私の専門は近世日朝交流史で、学部生・修士時代は宮崎克則先生のゼミに所属し、江戸時代の対馬藩に関する勉強をしていた。もともと歴史について関心を持ちながらも、対馬という場所に縁もゆかりもなかった私が対馬藩の研究をするに至ったのは、やはり指導教授の影響が大きい。宮崎先生が19世紀初めに日本を訪れたドイツ人医師・シーボルトに関わる研究をされていることもあり、ゼミや講義では近世の長崎、とりわけ出島や唐人屋敷に関する内容が扱われることが多かった。出島は教科書で学んだだけでなく、修学旅行でも訪れたことがある比較的なじみのある史跡だったが、大学で改めてこれらの施設が設置された目的と経緯などを反芻し、自分の中に取り込んでいくうちにふと疑問に感じたのは、日本人のために国外に設置された「出島」の存在の有無についてだ。倭館の存在は、ほんのわずかとは言え高校の教科書で触れられていたにもかか

わらず、当時の私はそういった施設は日本に特有なものだという思い込みがあった。日本の出島や唐人屋敷にあたるものが中世の朝鮮に設置されていたと改めて知った時、新鮮な驚きに満たされた記憶がある。倭館という施設の成り立ちやそこでの生活に関心を持った私は、4年次には国立国会図書館が所蔵する宗家文書をもとに卒業論文を執筆した。

2.「学芸員」への興味

国際文化学部という学部は、非常に特殊な学部だとある先生がおっしゃっていた。当たり前といえば当たり前のことなのだが、経済学部を例に挙げると、ミクロ経済学にせよマクロ経済学にせよ、国際経済学にせよ、学ぶことができるのは全て「経済学」の範囲なのだ。それは法学部であっても、薬学部であっても、体育学部であっても同様なのだが、「国際文化」という抽象的で概念的な単語を冠するこの学部は、はっきりとした定義が示しにくい。そしてそれは同時に、学べる事柄の幅が縛られていないということと同義である。西南学院大学の場合、それは歴史学や文化人類学、あるいは哲学、民俗学、考古学、文学、言語、芸術など多岐に渡り、学生たちは間口広く開かれた学問の波間を渡り歩くことができる。これをして、他の学部が掃除機や、電子レンジや、テレビなどの家電製品を専門に扱う「家電量販店」であるのに対し、国際文化学部は八百屋や、酒屋や、手芸用品店などの多彩なものが集まる「商店街」と言い表したその先生のたとえは、誠に言い得て妙であった。

大学で日本の歴史について学びたいという気持ちがあり、国際文化学部に入学したものの、私は将来何になりたいかと聞かれるといつも答えに困っていたように思う。そんな私が「学芸員」という職業を意識するようになったきっかけは、ゼミで古文書の埃払いを行ったことだろうか。役目を終え、長い間眠ったままで個人のお宅などから発見されたばかりの古文書は、埃や土、あるいは紙を食べた虫の糞や死骸、カビなどで汚れている。埃払いは、そのような余計なゴミを筆などで丁寧に取り除くことで資料を清浄する作業なのだが、教科書や資料集の中で見るような古い「資料」に自分の手で触れたのはこの時が初めてであったと記憶している。初めて触れるそれは、想像していたよりもごわごわしていて、埃っぽく、そして何よりとても日本語とは思えない、ミミズの這ったような文字が書き連ねられていた。今考えると、その時に見た資料が読めなかったのはいわゆる「御家流」（江戸時代の公用書体）と呼ばれる体裁の整った公文書のくずし方ではなかったためなのだが、古文書との出会いは、くずし字への苦手意識を植え付けるには十分なインパクトがあった。

そんな私が古文書を読んで卒業論文を書くに至ったのは、福岡市博物館で行われて

いた古文書講座に参加するようになったことが大きな契機であった。次第に読める文字が増えていき、少しずつ単語を解読できるようになり、やがて文章の意味を理解できるようになると、あっという間に夢中になった。資料を読み進め、何度も出てくる名前を覚えると、三百年前に生きていた顔も見たことがない人に対して、あるいは知り合いになったような親しみすら感じるようになったのである。また、古文書講座や勉強会に通ううちに、実際に福岡市博物館の学芸員の方と接する機会に恵まれ、次第に「学芸員」という職業に対する親しみと関心が増していった。それとは裏腹に、通常、学芸員課程の履修は学部２年次からおこなうことができるが、絶対に学芸員になりたい！という熱意のある同級生を見ていた私は、単に興味がある、というだけの中途半端な気持ちで学芸員課程を履修することに対して、ある種の後ろめたさを感じていたように思う。結局、決心がつかず２年次には履修を見送ったが、どうにも諦めがつかず３年次から学芸員課程を履修することを決心した。

３．学芸員課程の履修

学芸員課程では、博物館概論や資料論、経営論、展示論といった座学で博物館という施設が何たるか、学芸員に求められる姿勢や知識、技術とは何かを学ぶのと並行して、学内で博物館実習その１を受講した。当初は漠然と歴史系博物館のような内容を想像していたが、実習その１は美術や民俗、歴史、考古、自然史など幅広い分野を網羅しており、現場で働く先生方からの講義を受けることができた。この多分野に亘る実習の重要性とありがたさは、のちに西南学院大学博物館に勤務し始めてから体感することになった。西南学院大学博物館は、もともと大学の中に設置されていたバプテスト資料室で収集されていた聖書や写本類のコレクションが資料群の中核になっている。それに加えて、2006 年に博物館として開館するにあたり、新たに収集された日本キリシタン史に関する資料や、神学部名誉教授の関谷先生から寄贈されたユダヤ教に関するコレクションなど、資料の幅が広い。木製のイコンから陶磁器、革張りの古い聖書写本、巻子、古文書に至るまで取り扱う必要があったのだ。それは現在勤めている対馬博物館でも同様で、専門ではない仏像や甲冑、鞍、屏風などを取り扱わねばならない。また、パネルの作成など、学芸員が実際に行っている作業を体験することができたのは非常に意義があった。

それまでは漠然と､大学を卒業すれば一般企業に就職するのだろうと思っていたが、学芸員課程を履修し始めたことで、学芸員という仕事に対するリアリティが増したのだろうか。同じく３年次に、研究旅行奨励制度を利用したことで修士課程への進学を意識し始めるようになった。研究旅行奨励制度というのは、研究フィールドを実際に

訪れて文献や資料の調査・収集を行う学生に対し、旅費や滞在費等を補助する国際文化学部独自の制度である。このおかげで私は初めて対馬を訪れ、その足で韓国の釜山とソウルを訪問することができた。うだるような暑さの８月、万松院という対馬藩の歴代藩主の菩提寺を訪れた際に、ぽつんと置かれた手水鉢に目が留まった。正確にいうと、その手水鉢に刻まれたいくつかの名前が目に飛び込んできたのだ。それらの名前はまさにその時読んでいた古文書に登場していた人々で、文字でしか遺されていないと思っていた三百年前を生きた彼らの痕跡が、手水鉢という実体を伴って具現化したような現実感を覚えた。この時まで単なる解読対象としての文字情報に過ぎなかった古文書に記された出来事が、確かに生きていた誰かの肉声なのだという感覚に変化したことは、より深く資料と向き合うための原動力になった。

４．大学院への進学と大学博物館での勤務

その後、研究旅行奨励制度のおかげもあり、無事に卒業論文を提出することができた。卒業後の進路は就職と大学院進学でぎりぎりまで悩んだものの、やはりより深く研究をしたいという気持ちがあったために大学院の入試を受け、修士課程に進学することが決定した。修士課程に進学しなければ、実習その２を受けることができなかったはずなので、必然的に学芸員になるという選択肢は私の人生に存在しなかっただろう。実習先の希望を出す際には、本来ならば対馬歴史民俗資料館を希望したかったものの、対馬博物館の建設に向け休館中であったため、九州で唯一の国立博物館であり、宗家文書を所蔵する九州国立博物館を第一希望で提出した。学芸員課程の先生のお力添えもあり、実習その２は九州国立博物館で受けることになった。九州国立博物館での実習は、さすが国立博物館というだけあってかなり実践的かつ充実したものだった。座学の内容もさることながら、「あじっぱ」（体験型展示室）での展示や新たなワークショップの考案と実演、資料の写真撮影から監視やもぎりの体験といったものもあった。座学で特に勉強になったのは、IPM（Integrated Pest Management: 総合的有害生物管理）に関する講義だ。学芸員課程を履修する中で、博物館資料保存論などの講義で、資料の保存環境などによっては虫害やカビによる汚染などが発生することは学ぶが、実際に国立の博物館でどのような予防や対処が行なわれているかということを知ることができたのは大きかった。特に虫害によって資料に重大な汚破損が生じ易い紙資料を多く収蔵する対馬博物館ではIPMによる虫害の未然防止が切実であり、毎年展示室の燻蒸と資料の包み込み燻蒸のほか、インセクトトラップを設置した調査などを行っている。実習で教わったことが、実際に働き始めて重要だと気付かされる例の一つである。

常設展示室　展示作業風景

常設展示室　展示風景

また、実習その２で特に記憶に残っているのは、資料を一つ選び、演示具を自由に使って展示をし、展示の意図と工夫を説明するという授業だ。資料に関して事前に得られる情報は全くないため、この実習の目的は資料のどの部分に注目し、その魅力をいかに観覧者に伝えるか、という点に集約される。展示作業というのは、ある種学芸員の自己満足の世界でもあるので、その授業で展示方法と着眼点を褒められたことが未だに展示をすることへのモチベーションと自信につながっている部分がある。

夏に実習を終え、修士論文の執筆と両立できるアルバイトを探していた折、タイミング良く西南学院大学博物館が学生アルバイトを募集するという知らせが届いた。西南学院大学博物館は館長と学芸員が１人ずつ、学芸研究員が１人ないし２人、その他学芸調査員が５人程度と事務職員で構成されている。そのうち学芸調査員は、修士課程の学生や学部生で構成されており、博物館の日常的な運営業務を中心に行っている。学芸研究員は修士の学位を取得していることが条件であり、年に３回予定されている特別展や企画展の企画から展示、図録の作成までを行うほか、博物館が発行している「博物館ニュース」や年報、研究紀要などの原稿執筆・編集なども担当する。学内に博物館・資料館が併設されている大学が多くはないなか、学芸員課程を履修する学生がアルバイトをしながら博物館の業務に携わることができるのが、西南学院大学の大きな強みであろう。

修士課程を修了した翌年度からは、学芸研究員として引き続き大学博物館で働かせてもらうことになった。研究員として勤務した年には特別展を担当させてもらい、企画から図録の編集までを一通り経験した。博物館に就職すれば即戦力として働くことが求められるなかで、このような実務経験を積むことができたのは非常に貴重な経験であった。昨年の９月に母校の後輩たちが対馬博物館で実習を行ったが、同じ立場で実習を受けていた時には、まさか数年後に自分が対馬で学芸員として働いているということは想像だにしなかった。対馬の研究をするようになり、学芸員という職業に興

味を持つようになった。学芸員課程を履修し、大学博物館での勤務経験を経て、それが縁でいま、対馬で働いている。この巡り合わせは、まさに私の人生の行き先を大きく左右する出会いであったと思う。

5．博物館で働くということ

学芸員課程が設置されている大学は、実は半数に及ばない。西南学院大学は、学芸員課程を履修することができるだけでなく、学内の博物館や収蔵庫を実際に講義で見学したり、博物館でのアルバイトで実務経験を積んだりすることができる非常に恵まれた環境にある。惜しむらくは、学芸員課程を履修する学生のほとんどが国際文化学部の学生であるということだ。もちろん、史学や考古学、美術などに関心がある学生が国際文化学部に集まるからというのが大きな理由であろうし、実際に自分が学芸員課程を履修していた時には特に疑問を感じていなかった。しかし、大学博物館に勤務し始めて社会福祉学科や神学部の後輩たちに出会ったことで、博物館が博物館としての機能を果たすためには、学芸員が資料についての専門性を持ち合わせるだけでは不十分なのだということを痛感した。欧米諸国では学芸員の仕事が細分化されており、資料の登録・管理はレジストラー（registrar）、資料の保存・修復はコンサベーター（conservator）やレストアラー（restorer）、資料の梱包・輸送・展示に特化したクーリエ（courier）、博物館における教育はエデュケーター（educator）が行うなど、それぞれの分野に特化した専門職となっている。しかし、日本では職務が未分化であり、特に小規模な博物館の学芸員は、収集保管・調査研究・展示を行うだけでなく、教育普及などの博物館業務全般がこなせる万能細胞となることを期待される。そんななかで、例えば耳の聞こえない人や日本語を母語としない人も、展示を不自由なく見てもらうためには、福祉を専門に学ぶ人や、外国語に特化した人の存在が博物館にとって必要不可欠なのではないかと考えるようになった。

学芸員を取り巻く環境は、手放しに恵まれているとは言えない。分野によって多少の差異があるとはいえ、少なくとも修士号を取得していることが求められるにもかかわらず、非正規での雇用が大部分を占めている。それに加え、応募要項の多くに実務経験が盛り込まれていることもあり、慢性的な人材不足も相まって求められる仕事量は増え続けているのが現状である。しかし、大変なことが多い仕事ではあるが、先人たちから受け継いだ貴重な資料を研究しながら保存し、それを未来の世代のためにより良い状態で引き継ぐというリレーの中に身を置くことができるのは、この仕事でしか味わうことのできない醍醐味であろう。まだまだ駆け出しの身ではあるが、先輩方から多くのことを学び、一人前の学芸員となれるよう努力したい。